

乳幼児の気質研究の動向と展望

水 野 里 恵

The Recent Advances and the Future Directions of Temperament Research

Rie Mizuno

「親は第二子が生まれるまでは環境論者だが、それ以降は生得論者になる」などと言われることがある。実際に、第一子の時にはスムーズにできていた授乳や沐浴が第二子を相手にすると勝手に違ってとまどった経験を持つ親もいるだろう。また、第一子はちょっとした物音や環境の変化に敏感で場所が変わったり相手が代わったりするとなかなか寝てくれなかったのに、第二子はそうした問題を全く意識せずに済んだ経験を持っている親もいるだろう。あるいは、自分の幼い頃のエピソードを親に尋ね、親が驚くほど鮮明に「きょうだい」と対比させて「その子らしさ」を語ってくれるのに感心した経験を持つ者もいるだろう。このような乳幼児の一人一人の個性ともいべき特徴は、発達心理学では「気質」という概念で研究が進められている。

本論文では、発達心理学領域で研究対象になる主要な気質概念について概説した後、それらの気質概念を扱った研究の動向を紹介し、今後の研究の展望を試みたい。

発達心理学領域における主要な気質概念

発達心理学領域で研究される主要な気質概念には、気質的扱いにくさ (Thomas & Chess) 行動的抑制傾向 (Kagan) パーソナリティ特性としてのEAS (Buss & Plomin) 反応と自己制御における個人差 (Rothbart & Derryberry) 情動表出における個人差 (Goldsmith & Campos) の5つがある。これら5つの気質概念は、その概念提起の経緯から見た場合、大きく2つに分けることができる。1つは、子どもの個人差の現象を縦断的に研究していく過程で、最終的に気質的個人差であるとするのが妥当であるとの結論に達したという経緯を持つものである。それらに該当する気質概念には、気質的扱いにくさ (Thomas & Chess)・行動的抑制傾向 (Kagan) がある。Thomas & Chessは、Rutterからの指摘を受けて、自分たちが見いだした子どもの行動特徴における個人差に「気質」という用語を当てた (Rothbart & Bates, 1998) し、Kaganは、自分の見いだした子どもの個人差に興味を持ち、新たな縦断研究を進める過程でその個人差が気質的なものであるとの結論に達した。もう1つは、Thomas & Chessの研究により乳幼児の気質という概念が発達心理学領域で定着した後に提出されたものであり、それらは、情動に基礎

を置いた個人差を気質概念として捉えようとした研究者の洞察から出発したという点で共通している。それらには、パーソナリティ特性としてのEAS (Buss & Plomin)・反応と自己制御における個人差 (Rothbart & Derryberry)・情動表出における個人差 (Goldsmith & Campos) がある。以下に、それぞれの気質概念について概説する。

気質的扱いにくさ：Thomas & Chess

1956年に開始されたニューヨーク縦断研究 (New York Longitudinal Study: NYLS) への参加85家族の子ども141人のデータを分析している過程で、ある行動特徴を持った1群の子どもに特に注意が払われるようになった。当時乳児であったそれらの子ども達は、特に問題行動を呈しているというわけではないが、母親・インタビュアー・研究チームのメンバーによって「難しい子ども」(difficult children) とか「母親泣かせ」(mother killers) と呼ばれることが多く、彼らは気質のいくつかの側面においてその他の多くの乳児達ときわだって異なっていた (Thomas, Chess, & Birch, 1968)。この1群の子ども達は、日常リズムが不規則であり、新しい刺激に対して引っ込み思案で、環境の変化への順応性に欠け、機嫌がすぐに悪くなる傾向にあり、癩の強い反応をする傾向にあった。そして、後になって実際に問題行動を呈した子ども達の中に、これら1群の乳児達がかなりの割合で含まれていたことが大きな関心を引いた。さて、これらの子どもの親は、子どもへの接し方や養育行動において、そうした行動特徴を持たない子どもの親となんら変わっている点はなかった。また、子どもの誕生後しばらくの間の世話の仕方、その子どものきょうだいに対するものと比較して何ら異なった点は見いだされなかった。ところが、子どもが大きくなるにしたがって、これらの子どもの親の態度が子どもの健全な発達にはそぐわないものになるということが往々にして見られた。そして、こうした親の態度の変化は、子どもに接したり世話をしたりする時に起きてくる問題に対処したもののように見えたのである。さて、当時の親達に広く信じられていたのは、愛情深く受容的な親はしあわせな満足した子どもを持つという精神力動的理論であった。そこで、多くの親達が、子どもの問題行動は親の養育態度から説明できると信じるようになっていた。そして、母親の拒否的態度が扱いにくい子どもを作り出しているのだと無意識のうちに考えていた。ゆえに、扱いにくい子どもを持った親は、女性としてまた親として自分は果たしてこれでいいのだろうかと疑問さえ持つようになり、罪の意識や無力感を感じるようになっていた (Thomas, et al., 1968)。例えば、大きな声でよく泣く乳児を持ったある母親は、そうした罪障感を償うかのように、子どものそばで自分の時間の大半を過ごしたり子どもの欲求にすぐに答えたりしていた。だが、こうした対処の仕方があることはしばらくすると明らかになった。母親が子どもからの要求に応じていられるうちはよいが、彼女が応じきれなくなるとたちまち子どもの問題行動が表面化したのである。そして、それまでの彼女の対処の仕方が子どもの健全な発達をもたらすものでないことが露呈した。もちろん、扱いにくい子どもを持ったすべての親が、不適切な養育態度をするようになるわけではないが、difficult children (扱いにくい子ども) は、養育者に精神的負担を負わせたり、養育行動に工夫を強いていることが認識されるようになった。そして、

「気質的扱いにくさ」という概念は、パーソナリティの発達を考える時や社会化のエージェントである大人に影響を与えるという視点から、子どもの側の重要な個人差として注目され研究対象となっている。

行動的抑制傾向：Kagan

2～3歳ぐらいになると子どもの以下のような個人差が顕著になることに多くの人が気づくようになる。ある子どもは初めて出会った人にも人なつこく接したり初めて行った場所でもすぐに馴染んでしまうのに対して、ある子どもはそのような状況で恥ずかしがったり臆病になったりする。恐れを示す子どもさえいる。こうした子どもの気質的行動特徴は、89人の白人の子ども達を出生時から成人期初期まで縦断的に調査したFels Research Instituteのデータの分析において、3歳から児童期・青年期を通して一貫して見いだされた唯一の行動特徴であった。例えば、3歳の時に極端に引っ込み思案な子どもは、青年期に社交性に欠け依存的で従順であったが、こうした3歳の時点からの個人差の一貫性は男性に顕著であった。女性の場合は、児童期からの一貫性は見られたが、3歳の時点からの一貫性は男性の場合ほど顕著ではなかった。当時passivityという用語で呼ばれたこの個人差は、それが完全に発達初期の学習によるものかそれとも部分的には体質的な要因の間接的な産物であるかは疑問とされたが、その個人差がその後の子どもの発達に顕著な影響を与えていることだけは確かであった（Kagan & Moss, 1962）。

その後、ボストン近郊に住む63人の白人と53人の中国系アメリカ人の乳児とその家族を対象に子どもが3ヶ月齢から29ヶ月齢に達するまで追跡調査した縦断研究において、こうした子どもの個人差について以下の点が明らかになった。見慣れぬ状況でどの程度臆病になったり引っ込み思案の傾向を示すかといった個人差と心拍変動の個人差とは対応しており、それらの2つの個人差は乳児期を通して安定していた。また、中国系アメリカ人の乳児は白人の乳児に比較して引っ込み思案で臆病であり、心拍変動が安定していた。これらの結果から、新奇な状況で引っ込み思案になるか積極的に振舞うかにおける個人差は気質的個人差ではないかと考えられ、この点を解明するための研究が計画された（Kagan, Kearsley, & Zelazo, 1978）。

それは、見慣れぬ状況において極端に臆病になる（こうした行動特徴は「行動的抑制傾向（behavioral inhibition）」という用語で呼ばれるようになる）子どもと、見慣れぬ状況においてなんら不安を示さない子ども（「行動的非抑制傾向」な子ども）を選んで行われた2つのコホート研究である。これら2つのコホート研究の結果、初めて会った人物や見慣れぬ状況に対して物怖じする特性である「行動的抑制傾向」の気質概念が提案された。それは生理学的指標との対応を持つものであり、文化的要請の圧力や社会化の過程で変容されはするものの、発達初期から安定してみられる気質的個人差であるとされた。また、極端に抑制的傾向の子どもと極端に非抑制的な子どもとは普通の子どもの延長上にあるというよりも、違ったクラスターに属する子どもであると考えられた（Gersten, 1989; Kagan, 1989; Kagan, Reznick, Clarke, Snidman, & Garcia-Coll, 1984; Kagan, Reznick, & Snidman, 1987; Kagan, Reznick, & Gibbons, 1989; Snidman, 1989）。

パーソナリティ特性としてのEAS : Buss & Plomin

Buss & Plomin (1984) は、気質を発達初期に現れる生得的なパーソナリティ特性だと考える。

彼らによれば、気質は、以下の基準を満たしたものである。第一に、遺伝的なものである。これについては、双子研究や他の行動遺伝学的研究によって明らかになってきている。第二に、乳児期に顕現する。すなわち、気質は、発達初期の特性的個人差であり、後のパーソナリティ特性の基盤となるものである。

このBuss & Plomin (1984) の気質概念は、気質をパーソナリティ特性という広い意味合いから考えるので、通常生起する行動から構成される広い特性が研究対象となる。ただし、彼らの定義によれば、パーソナリティ特性は知能を含まないとされている。

気質の連続性といった問題は以下のように考えられている。たとえ、発達初期から見られる生得的なパーソナリティ特性であっても、遺伝子のスイッチは発達の過程でオンになったりオフになったりするもので、必ずしも連続性が見られるとは限らない。そこで、後の発達を予測するものとしての気質特性を研究対象とし、後のパーソナリティ特性とある程度の連続性を示すものを気質次元として概念化する。ゆえに、彼らは、気質次元として、Emotionality (情動性)、Activity (活動性)、Sociability (社会性) の3つを考えた。情動性は、負の情動をどの程度表わすかにおける個人差であり、いらだち・恐れ・怒りがどのくらい表出されるかにおける特性である。活動性は、動作の早さや活発さ・エネルギッシュな活動を好む傾向における個人差である。社会性は、他者との親和性の高さであり、どの程度他者に関わりを持とうとし活動を共にするかにおける個人差である。さて、Buss & Plomin (1984) は、情動性として負の情動表出(苦痛、恐れ、怒り)を一次元のものとして扱っている。これは、彼らが、出生時において乳児は快・不快の感情を経験するのみで、個々の感情はこの基本的な2つの状態から分化してくると考えるBridges (1932) の理論に依拠して、情動発達を考えているからである(Buss & Plomin, 1986)。ところで、Buss & Plomin (1984) は、EAS気質概念に基づき生涯発達の観点で研究を進めており、成人用の気質質問紙も開発している。ここでは、気質次元は、Distress (苦痛)、Fearfulness (恐れ)、Anger (怒り)、Activity (活動性)、Sociability (社会性) とされている。すなわち、成人期には情動が分化しているとの考えから、3つの負の情動が個別の気質次元として扱われている。

反応性と自己制御における個人差 : Rothbart & Derryberry

Rothbart & Derryberry (1981) は、気質について以下のように考えている。

気質は、反応性 (reactivity) と自己制御 (self-regulation) における体質的な個人差である。ここで、「体質的」というのは、遺伝・成熟・経験によって組み立てられた生物学的な機構という意味で用いられている。「反応性」は、環境における変化に対して個人が身体、内分泌系、自律神経系の反応を通して示す反応の特徴を指している。「自己制御」は、「反応性」を調整するために機能するプロセスを意味する。すなわち、注意をそこに向けたり逸らしたりすること、また、そうした反応をより増強したり減少させたりする行動様式のことである。気質は、パー

パーソナリティとはいくらか区別されうるものである。パーソナリティも反応性の個人差を意味するが、気質は反応性の力動的・精力的な面に強調を置く。反応閾値、潜時、反応の巾、反応強度が最高点に達するまでの時間、そこからの回復時間といったもので表される反応性の個人差が気質である。一方、パーソナリティは、気質を制御する役目を担うことになる自己概念や信念体系のような情報的概念的構造を含むものであり、気質を拡張したものである。このように気質とパーソナリティを区別することによって、パーソナリティの情報的概念的な面と気質の力動的な面とが相互に影響し合うという観点を考えることができるのである。気質は、情緒や動機づけの基礎をなす生物学的な機構に関係するものであり、心理生物学的概念である。気質概念を用いることで、神経系と行動とがいかに関連しているかの洞察がもたらされ、時間の経過や発達過程で行動生理学的プロセスがどのように組織化されるかを調べる可能性が開かれる。このパーソナリティの体質的な側面は成熟や経験によって変化することもあるが、ある程度の連続性は見られるであろう。例えば、ある刺激に対してどの程度敏感に反応するかはかなり安定したものであろうし、刺激に対処するためにとる方略はいつもある特定の方略であるとといった形で気質の安定性は示唆されると考えられる。

反応性と自己制御における個人差は、以下のように気質的個人差として表現されると Rothbart & Derryberry (1981) は考えている。

反応性における個人差は、気質反応特徴と気質反応系とについて考える必要がある。気質反応特徴における個人差は、どのくらいの刺激を与えられた時に反応するか（反応閾値）・反応をどのくらいの強さで表すか（反応強度）・刺激を受けてから反応を起こすまでどのくらい時間がかかるか（反応潜時）・反応が起きてから最大の反応強度に達するまでどのくらい時間がかかるか（上昇時間）・最大強度から反応が収まるまでどのくらい時間がかかるか（回復時間）において表すことができる。反応性において個人差があるのと同じように、反応のレベルや反応様式を制御する機能においても個人差が見られる。このような反応レベルを増強したり減少させたりあるいは反応様式を維持したり再構成したりする機能を、Rothbart & Derryberry (1981) は、自己制御機能における気質的個人差としている。具体的には、刺激に接近する行動、刺激を回避する行動、刺激に注意を向ける行動、自己刺激行動、自己鎮静行動を通して、自己制御における気質的個人差が議論されることになる。このように、乳児は、発達初期から自己や環境を積極的に統制するための方略を発達させており、こうした自己制御過程が、反応性の強度を増したり弱めたり潜時を長くしたり回復時間を早めたりすることによって、反応性の構造を形成するのに寄与している。一方、自己制御過程は、反応性によって影響を受けるので、どのような反応が生じたかによってどのような自己制御過程が働くかが決まってくるという面を持っている。

Rothbart (1981) は、Rothbart & Derryberry (1981) の気質概念を実証研究にのせるために気質質問紙 (Infant Behavior Questionnaire (IBQ)) を開発した。その経緯によると、当初用いられた項目は Shirley (1933) や Thomas et al (1968) などの先行研究を参考にしたものであり、気

質次元は11次元を想定していた。乳児を持つ両親へのインタビューと質問紙調査を通して、概念的妥当性の検討・項目分析を経て、以下の6次元が独立した気質次元とされた。それらは、Activity level（活動性の水準）、Smiling and laughter（微笑と笑い）、Fear（恐れ）、Distress to limitation（制限を与えられた場合の負の情動表出）、Soothability（鎮静の容易さ）、Duration of orienting（注意の持続性）の6次元である。

情動表出における個人差：Goldsmith & Campos

Goldsmith & Campos（1982）は、乳児期に限った気質概念を定義している。その理由として、乳児期は、その後の発達段階と較べると、社会化の影響をあまり受けておらず、気質の特徴が覆い隠されることが相対的に少ないこと、乳児の行動や情動表出は、それほど強く認知的なプロセスに媒介されておらず、解釈が比較的容易なことに言及している。そして、彼らは、気質を生物学的概念や中枢神経系の賦活・抑制といった概念と対応させて定義するということをしないで、行動様式を中心にした気質の定義を採用している。その理由として、彼らは、乳児が気質の特徴として表出する行動様式は、乳児と関わり合いを持つ他者（養育者であったり、きょうだいであったり、時には、実験者であったりする）にとって、意味があり、認知されうるレベルで分析される必要があるからだとしている。また、行動上に顕れるものが、生理学上の指標よりも容易に見極められるものであることもその理由の一つとなっている。彼らによる乳児期の気質の定義は以下のとおりである。

- 1．気質は個人差の概念である。
- 2．気質は体質上の概念である。

ゆえに、安定性の程度と安定性の性質は気質次元によって様々であるとしても、気質次元は安定したものである。

- 3．気質次元は情緒と関連を持つ。すなわち、気質は情動的なものである。

情緒に関連した現象というのは、分化した個々の情動（すなわち、喜び・怒り・恐れなど）と一般的な覚醒状態との双方を含む。ところで、情動は、中枢神経系に関連を持つ感情状態であり、個人を動機づけたり、それが表出される限りにおいて他者に社会的に意味のある情報を提供したりする。飢餓とか喉の渇きなどの動因は一般的には伝達可能な社会的シグナルとはならないが、情動はそれが伝達可能なシグナルとなるという点で、動因とは異なったものである。また、情動は、社会的学習を必要とせず文化と関連の無い普遍的な表出形態をとるという点で、ジェスチャーや言語などの社会的シグナルとも区別される。

- 4．気質の個人差は、それぞれの気質次元が表出される時の強度のパラメーターと時間的パラメーターで表される。

閾値と表出における強度が、強度のパラメーターであり、表出までの潜時・最強の表出がなされるまでの時間・回復するまでの時間が、時間的パラメーターである。よって、「怒りの閾値」・「苦痛からの回復力」という形で、気質における個人差を表すことができる。

彼らが考える気質次元は情動の各次元である。これは、彼らが情動発達について、Izard &

Malatesta (1987) の Differential emotions theory (分化した情動の発達理論) と同様に考えるからである。ここで、Differential emotions theory とは、人間には出生時に既に分化した情動が存在しており、それらの分化した情動が実際に他者から観察できるようになるには成長を待たなければならないことを留保したうえで、さらなる分化は必要ないとする情動発達理論である。すなわち、基本的情動は生得的なものであり分化して発達するものではないが、情動の表出自体は、神経系の成熟的变化と社会化の双方の結果として、機能・形態において発達的变化をすると考える情動発達理論である。この理論は、個々の情動が既に分化した形態を持って出生時に存在すると考える点で、未分化の状態から個々の分化した情動が発達すると考える Bridges (1932) とは異なっている。ゆえに、Differential emotions theory の立場に立った場合、気質的個人差はそれぞれの情動の各次元(怒り、恐れ、苦痛、喜び、など)の表出における時間と強度のパラメーターで表されるのである。

以上、発達心理学領域における主要な気質概念5つについて簡単に概説した。いずれの気質概念も(1)体質的なものである、(2)乳児期に表れ、ある程度の発達の連続性を持つ、(3)客観的に判断できる個人差である、(4)環境の影響を受けて変化しうる、と考える点では共通しているといえるであろう。

乳幼児の気質研究の動向

乳幼児の気質概念を発達研究に取り入れるということはどのような意味を持つことなのだろうか。どのような意味において、初期経験の重要性を指摘してきたそれまでの発達研究と異なるのであろうか。乳幼児の気質に注目する研究は、乳幼児がそれぞれ自分なりの独特なやり方で周りの環境に働きかける存在であるがゆえに、初期経験が重要であることを強調する。これは、どの乳幼児も同じように環境に適応するに足る感受性を備えた存在であるので、初期経験が重要であるとする立場とは明らかに一線を画するものである。それは、発達の方向性を自ら選択する子どもという姿を描いている点でも異なっているし、発達主体と関わり変容する大人という姿を描いている点でも異なっている。

発達心理学領域における主要な5つの気質概念を取り入れた研究は、乳児の愛着測定法、母親の精神的健康と養育態度などの発達研究の枠組において、伝統的な発達研究に対して問題提起を行い、多くの知見を集積してきた。そして、近年では、子どもの社会化理論に対しても新たな問題提起を行っている。

子どもの社会化の発達過程

近年、乳幼児の気質を子どもの社会化の発達過程に取り入れようとする試みがなされるようになってきている。そこでは、社会化のエージェントとしての親のしつけ方略と子どもの気質的個人差との2つの要因を道徳的行為の発達過程に関与する要因と考えるモデルが提案されてい

る。このモデルでは、気質的個人差は、親が行う子どもの社会化の効果を媒介するものとして考えられている。

親のしつけ方略と交互作用を持つ子どもの行動的抑制傾向

Kochanskaは、子どもの気質的個人差としての行動的抑制傾向に注目し、恐れやすい子どもとそうでない子どもを比較して、母親のしつけ方略が初期の良心の発達に違った影響を及ぼすとの仮説を以下のように提起している（Kochanska, 1991；Kochanska, 1993；Kochanska, 1995）。恐れやすかったり不安を感じやすい子どもが不適切な行為をしている時に、親が力に訴えない寛容なしつけ方略を取るとは、子どもに自分の行為が適切なものではないことに気づかせるために最適な程度の「居心地の悪さ」を感じさせることになる。そこで、こうした子どもの場合、親の力に訴えないしつけ方略は良心の発達を促すことになる。だが、恐れを感じにくい子どもにとっては、そのような寛容なしつけ方略は子どもに良心の痛みを感じさせるまでには至らない。ゆえに、親の力に訴えないしつけ方略は同じような効果をもたらさない。もっとも、こうした子どもにとっては、単にしつけ方略を力に訴えるものにするだけでは効果は得られない。力に訴えるしつけ方略は、おそらくどのような場合でも、子どもに行動規準の内面化を促すにはマイナスの影響しか及ぼさないと考えられる。それらは子どもに怒りや恨みの感情を部分的にせよ引き起こし、親のメッセージを意味的な記憶として貯蔵するのではなく、個人的記憶として貯蔵してしまうと考えられるからである。すなわち、「何について叱られたのか」を記憶するのではなく、「誰が自分を叱ったのか」を記憶してしまう。寛容なしつけ方略が不適切な行為をした時に自ずと感じる「居心地の悪さ」を呼び起こすのに対して、権威に訴えたり罰を与えたりするしつけ方略は子どもの注意をそうした「居心地の悪さ」からそらしてしまう。つまり、子どもは、自分の行為が内的規準に反しているから悪いと考えるのではなく、その行為が叱責や罰の対象になるからよくないと考えるようになってしまう。それでは、恐れにくい子どもにとってはどのように行動規準の内面化はされるのであろうか。寛容なしつけ方略は彼らに良心の痛みを感じさせるに十分なレベルではないので、親の寛容なしつけ方略と恐れにくい子どもの良心の発達との間には関連は見られないであろう。おそらく、彼らの場合には親子間の関係性の質が親の行動規準を内面化させるのに促進的に作用するのであろう。

以上のような仮説を立て、Kochanskaは、子どもの行動的抑制傾向・親のしつけ方略・親子の関係性の質の3つの要因を組み込んだ実証的研究を実施した。その結果、気質と親子の愛着の質・親のしつけ方略の間に交互作用が見られた。すなわち、気質的に恐れやすい子どもは母親の力に訴えない寛容なしつけ方略が良心の発達を促進していたのに対し、気質的に恐れにくい子どもの場合は母親のしつけ方略と子どもの良心の発達の間に関連は見られず母子間の愛着の質が良好であると良心の発達が進んでいた。これらの結果から、Kochanskaは、子どもの行動規準の内面化のメカニズムが、恐れやすい気質である子どもの場合と恐れにくい気質の子どもである場合では異なると主張している。ただし、仮説が支持されたのは第2回調査での良心の発達指標をとった場合で、第3回調査の良心の発達指標を従属変数にした場合は有意な結果

はごく一部に見られたのみであった。この理由の一つとして考えられるのは、子どもが他の子どもと遊ぶ機会が増えたり幼稚園に行くようになって様々な社会化の影響にさらされるようになることがあげられる。こうなると、子どもの良心の発達も、もはや家庭環境や母子間の愛着の質と子どもの気質との交互作用のみでは説明しきれず、多くの要因が良心の発達に影響を及ぼし子どもの気質と様々に相互作用する可能性が出てくるのである（Kochanska, 1997）。

さて、Kochanska（1997）の結果においては、良心の発達の速度に子どもの年齢と気質の交互作用が見られた。すなわち、恐れやすい子どもの良心の発達の速度は恐れにくい子どものそれに比較して有意に早かった。また、第1回調査では恐れやすい子どもの方が恐れにくい子どもよりも良心の発達が進んでいた（Kochanska, 1995）。Kochanskaは、これらの結果から、よちよち歩き頃と同じように就学前期の終わり頃になると恐れやすい子どもの方が良心の発達が進む傾向にあるのではないかと考察している。確かにこうした見解に一致する理論もある。それによると、気質的に不安を感じやすい子どもは自分の経験から「情緒的地図（affective maps）」を発達させる。その「情緒的地図」の中では脅威を与えるような出来事に関連した情報が顕著で明確になっている。そして、そのような表象は自分や他者が過去に為した悪事とその結果生じた気まずい思い・引き続いて起こった良くない出来事に強く結びついている。それゆえに、それは罪や抑制といった良心に関連したメカニズムの急速な発達を促すのである（Derryberry & Reed, 1994）。

これらの一連の研究結果は、乳幼児期の子どもの社会化過程の重要な要因として、従来から研究対象となってきた親のしつけ方略以外に、子どもの気質の要因を考える必要性を提起した点で注目されるものである。そして、分析結果は今後さらに検討していくべき要因や要因間の関連を提示している。

行動統制の過程で働く要因としての行動的抑制傾向と行動規準の内面化の過程に働く要因としての気質的扱いにくさ

上述したように、Kochanskaは、行動的抑制傾向にある子どもは母親の寛容なしつけ方略によって行動規準の内面化を発達させるが、行動的非抑制傾向にある子どもの場合は寛容なしつけ方略は行動規準の内面化の促進要因とはならず母子間の愛着の質が促進要因になるであろうとの仮説のもとに研究を進めている。

それに対して、水野（2002）は、行動的抑制傾向は、行動規準の内面化の過程よりはむしろ行動統制の過程で関わってくると考えている。なぜならば、自己制御機能の自己主張的側面を考えてみた場合、以下のようなことが考えられるからである。恐れにくい子どもは、そうではない子どもと比較して、行動規準に従って自ら行動を起こさなければならない時（自己主張的自己制御機能が必要となる時）に容易にそのようにふるまうことができると思われる。例えば、行動的抑制傾向にある子どもにとっては「順番に割り込まれた時には自己主張すべきである」という内的行動規準を持っていてもその行動規準に従った行動を起こすことは難しいが、行動的非抑制傾向にある子どもにとってはその行動規準に従った行動をとることは比較的容易であ

ろう。このことから、行動の統制過程においては子どもの気質によって容易に統制できる行動とそうではない行動があるのではないかと考えられるのである。

そして、10ヶ月齢から研究に参加している母子42組（男児の母子21組、女児の母子21組）に対して、3回の質問紙調査と実験的観察調査（平均年齢：4歳7ヶ月）を実施した結果から、子どもの行動的非抑制傾向が、「約束違反をされた時にそれを指摘する」という行動規準に適った自己主張的行動をとりやすくしている可能性があることを示した（水野, 2002）。すなわち、初めて会う人物や普段とは違う状況で物怖じすることのない行動的非抑制傾向にある子どもは、そうでない子どもに対して、自らの意思を主張すべき場面でその規準に適った行動をとることが多かったのである。

次に、Kochanskaは愛着の質は行動的非抑制傾向にある子どもの場合に良心の発達（すなわち行動規準の内面化の発達）に促進的に働くと考えたが、水野（2002）は、親の行動規準の内面化の過程では、子どもの行動的抑制傾向に関わらず母子間の愛着の質は促進的に働くと考えている。そして、この行動基準の内面化過程に子どもの「気質的扱いにくさ」という要因を取り入れてメカニズムを考える必要性を主張している。そのあたりの事情については以下のように説明される。子どもが気質的に扱いにくいと親の精神的健康や養育態度にマイナスの影響が出やすく、親のしつけが有効に働かなくなる可能性が高くなる。反対に、子どもが気質的に扱いやすいと社会規範の伝達を担う養育者との関係性の質が良好になり、そのメッセージが子どもに受け入れられる可能性が大きくなる（Grusec & Goodnow, 1994）。つまり、子どもの気質的扱いにくさは親子の関係性の質に影響を与え、行動規準の内面化の過程に影響を与えると考えられる。

そして、10ヶ月齢の子ども150人の5年間の縦断研究の結果、自己制御機能の主張面・抑制面ともに発達していた子どもは、気質的に扱いやすい子どもであり、母親から説明によるしつけ方略を多く受けていたことを明らかにした（水野, 2002）。このことから以下のことが推測される。子どもが気質的に扱いやすいと母親はあまりストレスを感じることなく養育行動に携わることができる。そして、親が説明によるしつけ方略を使用する余地が広がる可能性がある。こうした親の説明によるしつけ方略は、子どもに社会的規範を伝達し、子どもの行動規準の内面化に寄与しているのではないか。このように、子どもの気質的扱いにくさは行動規準の内面化過程で間接的にせよ関与する一つの要因となりうる。

乳幼児の気質研究の展望

子どもの社会化の発達過程に働く要因として乳幼児の気質を取り入れた研究は、メカニズムの解明にその研究の矛先を向けていくことが期待されている。また、乳幼児の気質研究はパーソナリティ研究との統合を目指して、パーソナリティの生涯発達研究へとその研究を展開させていくであろう。そこで、本項においては、そうした研究を行う際の留意点について論じておきたい。

子どもの社会化の発達過程

乳幼児の行動的抑制傾向や気質的扱いにくさといった気質要因を子どもの社会化の発達過程に取り入れた研究は、それら2つの気質要因が親のしつけ方略に何らかの影響を及ぼしていることを明らかにしようとしてきている。また、情動に基礎を置くRothbart & Derryberry (1981)の気質概念の視点を取り入れると、発達初期から見られる情動の制御における気質的個人差が、子どもが幼児期になってから獲得する自己の行動規準に沿って自らの行動を統制する自己制御機能の個人差と関連を持つと考えるのが妥当である。

これら乳幼児の気質要因を取り入れた子どもの社会化過程についての研究を進める場合、行動規準の内面化過程における親のしつけ方略の有効性を考えるには子どもの年齢といった発達の観点抜きにはできないとの研究から学ぶ点が多い。

例えば、Brody & Shaffer (1982)は以下のような知見を見出している。道徳性の発達という観点から見た場合、力に訴えるしつけ方略は子どもの年齢に関わらず負の効果を与える。それに対して、説明によるしつけ方略は7歳以降においてのみ道徳性の発達を促進するのに寄与する。自己中心性から脱却できていない年齢層の子どもにとっては、他者の観点に立つ結果誘導的な説明は理解するのが困難だと考えられるがゆえに、有効に機能しないと考えられる。そして、そうした知見を支持する研究結果、すなわち、子どもが逸脱行動をすると何らかの物理的損害が生じるのだとする説明は、他者の財産に対する尊敬を促すという抽象的説明よりも、4歳の子どもの問題行動を抑制するのにより効果的であったが、7歳の子どもの場合はどちらの説明でも同じ効果があったとの実証研究の結果を報告している。また、Siegal & Cowen (1984)によれば、幼い子どもは年齢の高い子どもよりも母親による体罰をより好意的に評価していたことが報告されている。このように、親のしつけ方略は、Kochanska (1991, 1993, 1995, 1997)の一連の研究のように子どもの行動的抑制傾向と交互作用を持つばかりでなく、子どもの年齢とも交互作用を持っている。

また、乳幼児期に限定して行動規準の内面化の過程を考えた場合、以下のような知見が参考になる。Emde, Biringen, Clyman, & Oppenheim (1991)は、正常な発達過程を辿るならば3歳になる頃までに子どもの自己は「道徳的自己」になると考えている。1歳をすぎる頃になると、行動規準を犯すことに対する子どもの感受性は道徳的制御の重要な先行要因になる。それらは、規準を表象化する子どもの認知や自己の発達に結びついている (Stipek, Gralinski, & Kopp, 1990)。そして、自己が出現すると、悪いことをするという行為自体が子どもに大きな情緒的インパクトを引き起こすようになる。子どもは、自己の規準に沿わない行動をした時に恥や罪など様々な感情を持つようになるのである。さて、子どもは不確かな事態に遭遇した時には親の情動表出を参考にして自分の行動を決めることが明らかになっている (Campos & Stenberg, 1981)が、このことは、親の持つ行動規準を伝達するのに必ずしも言語的コミュニケーションを必要としないことを意味する。すなわち、親子間の情動的コミュニケーションによって親の行動規準を子どもに伝達することが可能であり、情動的コミュニケーションは子どもの行動規

準の内面化にとって重要な機能を果たしていると考えられるのである。また、子どもは3歳になる頃には、その場には居合わせない親を参照するような能力を備える。その段階になると、子どもは表象化された親の情動を参照することができるようになり、たとえ親がいなくても自分のとろうとしている行動がどのような情緒的意味を持つかを推測し、親の行動規準に従って行動を制御するようになるのである (Emde, et al., 1991)。この見解は、少なくとも乳幼児期に限って行動規準の内面化を考えた場合、結果誘導的なしつけ方略の持つ認知的側面の重要性よりも、親子のコミュニケーションの持つ情緒的側面を重視する見解である。

以上の知見を総合的に考えると、子どもの発達段階を考慮したうえで、親のしつけ方略の有効性を考える必要があることは明らかである。そのうえで、子どもの年齢と気質的行動特徴が親のしつけ方略とどのようなメカニズムで子どもの社会化に影響を及ぼすかを明らかにしていくような研究が望まれる。

パーソナリティ研究との統合

Capsi (1998) によれば、気質研究とパーソナリティ研究との統合の必要性が認識されるようになったが、その研究の方向性として以下の2点があげられている。第一は、気質的特性とパーソナリティ特性に連続性が見られるのかを検討しようとする研究の必要性である。第二は、発達初期に見られる気質的特性がいかにしてパーソナリティ特性へと統合されていくのかのメカニズムを明らかにしようとする研究の必要性である。そこで、これら気質研究とパーソナリティ研究を統合しようとする研究を進める過程で出てくると考えられる問題について論じた上で、どのような提案ができるのかを考え、今後の方向性を探りたい。

気質からパーソナリティへの発達過程について研究を行う場合、どの位初期からの研究が有益な成果を生み出すかという問題がある。これについて、Capsi (1998) は、1歳代がポイントになるとし、その理由を以下のように述べている。認知的・情緒的变化がこの時期に起きる。1歳を過ぎると子どもは物の永続性がわかるようになり延滞模倣ができるようになり象徴的遊びをすることができるようになる。自己意識との関連で経験される embarrassment (当惑) や shame (恥) などの情緒が表れるようになる。こうした能力や情緒は、自分の世界についての表象を形作ったり、信念や期待を発達させるのに必要なものである。おそらく、乳児が1歳代に入ってこうした発達の変化を遂げるまでは、行動的特性の個人差に関して連続性や予測性を期待することはできないであろう。1歳以降にならないと予測性が保証されない理由は以下にもよる。観察される乳児の行動が一過性のものである可能性である。しかし、乳児が成長するに従って行動が一過性である可能性は減少していき、行動的特性が安定したものになる。このどの位初期からの研究が有益な成果を生み出すかという問題に関して、水野 (2002) は、10ヶ月齢以降になると、気質的扱いにくさと行動的抑制傾向とが乳幼児期を通してある程度安定した個人差として見られることを明らかにした。また、10ヶ月齢を過ぎる頃に見られたそれら2つの気質における個人差が、母子の相互作用過程でも子ども自身の社会化の過程でも関与する

メカニズムについていくつかの示唆を与えた。これらのことより、1歳前後から気質からパーソナリティへの発達過程の研究を開始することは有益であると思われる。

さて、近年、人間行動遺伝学は、構造方程式モデリングという統計手法を使用して、遺伝的要因の影響が特定の気質次元やパーソナリティ次元のどの程度の割合を占めているかを同定するようになってきた(安藤, 2000)。それは、構造方程式を双生児や養子などの多変量データにあてはめ、最もデータに適合した方程式を解くことにより、パーソナリティの個人差を遺伝的要因・共有環境要因・非共有環境要因の3つの部分に分割するという方法をとる。そして、その結果、外向性や神経質さ(情緒安定性)は非相加的遺伝効果を示す形質(個々の遺伝子ではなく、関与する遺伝子の組み合わせが一致して初めて前世代との類似性を表わす形質)であり、遺伝の寄与率が大きいことが明らかになってきている。さらに、こうしたパーソナリティへの遺伝の寄与率を計測するという研究とは別に、遺伝子レベルまで掘り下げた研究も目立ちはじめており、今後の発展が予想され期待もされている(山崎, 2001)。

気質研究においても、過去に行われた双生児研究と養子研究を構造方程式モデルを用いてメタ分析を行い、気質的個人差における遺伝要因・共有環境要因・非共有環境要因を同定する試みがなされるようになった。その結果、遺伝的な要因が気質に影響を与えていること、その効果は2歳になる頃にはっきりすることが明らかになった。そして、共有されている環境の影響は非常に小さいものであるが、非共有環境(環境のうち、家族のメンバー間で違いの見られるもの、例えばきょうだいを通う学校のそれぞれのクラス)は気質的特性の十分に大きな分散を説明することが示された(Capsi, 1998)。

このように、パーソナリティ研究・気質研究双方において、個人差の分散に占める非共有環境の大きいことが明らかになってきている現状を踏まえて、Capsi(1998)は、非共有環境のうちで最も重要なものが何かを同定するには、社会化の研究における伝統的サンプリング方略を再考すること、環境の影響を測定する新しい方法を企画することが必要であることを以下のように主張する。第一に、特定のどの環境が子どもの気質やパーソナリティに影響を与えているのかを同定するためそれぞれの家庭から2人以上の子どもの対象にする必要がある。第二に、非共有環境の影響を測定する新しい方法を開発する必要がある。そして、特定の非共有環境の影響が同定されたら、次にその方向性の問題と取り組む必要がある。すなわち、非共有環境がパーソナリティの違いを生み出すのか、あるいはパーソナリティの違いが非共有経験の違いをもたらす原因となっているのかの方向性を明らかにできるような研究を行う必要がある。そして、それを明らかにするには、きょうだいにおける初期の環境の違いを統制して行う縦断的研究が有効であると主張する。ところで、非共有環境は遺伝的なものによって媒介される。すなわち、きょうだいはそれぞれ自分のパーソナリティ特性に関連した方法で経験を解釈したり形作ったりする。きょうだいにおける違いは、とり扱いにおける客観的な違いというよりも、むしろ「他者からの反応を引き起こす違い、どういう機会を選択するのか無視するのかにおける違い、そして自分自身の経験を構成する仕方における違い」なのである。ゆえに、遺伝に媒

介されない非共有環境要因を特定するためには、一卵性双生児を対象にした研究が必要になってくる。

乳幼児の気質研究は、こうした問題意識を念頭に置いて、今後、双生児・養子・きょうだいなどについての縦断データを多面的な測定方法によって収集し、気質の各次元において遺伝要因の寄与率を計測し、環境要因と遺伝要因とが発達過程においてどのようなメカニズムで関わってくるかを解明する方向に進むと思われる。そして、それをパーソナリティの発達過程へと統合していく方向性を目指すであろう。より具体的には、気質がパーソナリティ特性へと発達する際に辿る6つの過程（学習の過程、環境から反応を引き出す過程、経験を構成する過程、社会的比較や時間的比較をする過程、環境を選択する過程、環境を操作する過程）におけるメカニズムの解明へと向かうだろう。そして、そうした検討を通して、発達初期から見られる体質の個人差がたび重なる強化を経てどのように認知構造の中に洗練化されていくのかのメカニズムを解明していくことが期待されている。

文 献

- 安藤寿康(2000) 心はどのように遺伝するか：双生児が語る新しい遺伝観. ブルーボックス 講談社.
- Bridges, K. M. B. (1932) Emotional development in early infancy. *Child development*, 3, 324-334.
- Brody, G. H., & Shaffer, D. R. (1982) Contributions of parents and peers to children's moral socialization. *Developmental Review*, 2, 31-75.
- Buss, A. H., & Plomin, R. (1984) *Temperament: Early developing personality traits*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Buss, A. H., & Plomin, R. (1986) The EAS approach to temperament. In R. Plomin & J. Dunn (Eds.), *The study of temperament: Changes, continuities and challenges* (pp. 67-79) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Campos, J. J., & Stenberg, C. R. (1981) Perception, appraisal, and emotion: The onset of social referencing. In M. E. Lamb & L. R. Sherrod (Eds.), *Infant social cognition* (pp. 273-314) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Capsi, A. (1998) Personality development across the life course. In N. Eisenberg (Ed.), *Social, emotional and personality development* (pp. 311-388) New York: John Wiley & Sons.
- Emde, R. N., Biringen, Z., Clyman, R. B., & Oppenheim, D. (1991) The moral self of infancy: Affective core and procedural knowledge. *Special Issue: The development of self: The first three years. Developmental Review*, 11 (3), 251-270.
- Gersten, M. (1989) Behavioral inhibition in the classroom. In S. J. Reznick (Ed.), *Perspectives on behavioral inhibition* (pp. 71-91) Chicago: University of Chicago Press.
- Goldsmith, H. H., & Campos, J. J. (1982). Toward a theory of infant temperament. In R. N. Emde & R. Harmon (Eds.), *The development of attachment and affiliative systems* (pp. 161-193) New York: Plenum.
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994) Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view. *Developmental Psychology*, 30(1), 4-19.
- Izard, C. E., & Malatesta, C. Z. (1987) Perspectives on emotional development 1: Differential emotions theory of early emotional development. In J. D. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development* (pp. 494-554) New York: John Wiley & Sons.

- Kagan, J. (1989) The concept of behavioral inhibition to the unfamiliar. In S. J. Reznick (Ed.), Perspectives on behavioral inhibition (pp. 1 -23) Chicago: University of Chicago Press.
- Kagan, J., Kearsley, R. B., & Zelazo, P. R.(1978) Infancy: Its place in human development. Cambridge: Harvard University Press.
- Kagan, J., & Moss, H. A(1962) Birth to maturity: A study in psychological development. New York: John Wiley & Sons.
- Kagan, J., Reznick, J. S., Clarke, C., Snidman, N., & Garcia-Coll, C(1984) Behavioral inhibition to the unfamiliar. Child Development, 55, 2212-2225.
- Kagan, J., Reznick, J. S., & Snidman, N(1987) The physiology and psychology of behavioral inhibition in children. Child Development, 58(6) 1459-1473.
- Kagan, J., Reznick, J. S., & Gibbons, J(1989) Inhibited and uninhibited types of children. Child Development, 60, 838-845.
- Kochanska, G(1991) Socialization and temperament in the development of guilt and conscience. Child Development, 62 (6) 1379-1392.
- Kochanska, G(1993) Toward a synthesis of parental socialization and child temperament in early development of conscience. Child Development, 64(2) 325-347.
- Kochanska, G(1995) Children's temperament, mother's discipline, and security of attachment: Multiple pathways to emerging internalization. Child Development, 66(3) 597-615.
- Kochanska, G(1997) Multiple pathways to conscience for children with different temperaments: From toddlerhood to age 5. Developmental Psychology, 33(2) 228-240.
- 水野里恵(2002) 母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質. 風間書房.
- Rothbart, M. K(1981) Measurement of temperament in infancy. Child Development, 52, 569-578.
- Rothbart, M. K., & Bates, J. E(1998) Temperament. In N. Eisenberg(Ed.) Handbook of child psychology 5th edition Volume 3: Social, emotional and personality development (pp. 105-176) New York: John Wiley & Sons.
- Rothbart, M. K., & Derryberry, D(1981) Development of individual differences in temperament. In M. E. Lamb & A. L. Brown(Eds.) Advances in developmental psychology (pp. 37-86) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Shirley, M. M(1933) The first two years: A study of 25 babies Volume 3 Personality manifestations. Minneapolis: University of Minnesota.
- Siegal, M., & Cowen, J(1984) Appraisals of intervention: The mother's versus the culprit's behavior as determinants of children's evaluations of discipline techniques. Child Development, 55, 1760-1766.
- Snidman, N(1989) Behavioral inhibition and sympathetic influence on the cardiovascular system. In S. J. Reznick (Ed.) Perspectives on behavioral inhibition (pp. 51-70) Chicago: University of Chicago Press.
- Stipek, D. J., Gralinski, J. H., & Kopp, C. B(1990) Self-concept development in the toddler years. Developmental Psychology, 26(6) 972-977.
- Thomas, A., Chess, S., & Birch, H. G(1968) Temperament and behavior disorders in children. New York: New York University Press.
- 山崎勝之(2001) 日本における性格研究の動向と展望. 教育心理学年報 41, 73 ~ 83.